

【実践報告】

学校栄養教育実習Ⅱの報告

広島文教大学人間科学部人間栄養学科

講師 塩 田 良 子

1 はじめに

栄養教諭一種免許状の取得を希望する教職課程履修学生を対象とした教育実習は、授業科目「学校栄養教育実習Ⅱ」に含まれる。本実習は栄養教諭としての修得すべき知識・技術に関する内容が中心となる小学校等での教育の現場で行うものであり、その目的は、栄養教諭としての使命感を自覚し、職務内容について理解を深め、教育に関する資質と栄養に関する専門性を育成することである。

2 実施のスケジュール

時 期	主な内容
4月～5月 事前学習 (学内)	・本実習の意義、目的、心構え等を再確認する。 ・実習校への事前訪問により、指導教諭等の指導担当者から、担当となる学級の児童・生徒の実態や、食に関する指導の全体計画、実習の事前課題を確認する。 ・実習校より出された課題について、模擬授業や給食指導、展示物の作成等を行う。作成物についてお互いに評価し合い、よりよい授業・教材になるよう工夫を重ねる。
9～10月 本実習 (学外) 5日間	・実習の内容は実習校により計画される。主な内容として、①指導教諭等からの学校・学級経営の説明、②児童及び生徒への個別的な相談、指導の実習、③児童及び生徒への教科・特別活動における指導の実習、④食に関する指導の連携・調整の実習が挙げられる。 ・実習中は教育実習日誌等の記録をつけ、栄養教諭の役割・業務等について理解を深める。 *当初予定の6月期は新型コロナウイルス感染対策期間と重なり、9～10月に延期
9～11月 事後学習 (学外)	・各自の実習を振り返り、記録をまとめる。 ・各自の実習内容についての報告会を実施する。報告会では、与えられた課題の取り組みを通して学んだことや研究授業の紹介等について発表する。*報告会 11/17

3 活動の概要

(1) 研究授業の題目等（学生の報告資料より抜粋）

学年・教科	題目	ねらい
小学4年生 【特別活動】	「どんな食事が体にいいのか知り、好き嫌いせずに食べる気持ちをもとう」	偏った食べ方は体に悪いことを理解することができる。バランスの良い食事に野菜や魚が欠かせないことが必要である。 食育の視点：心身の健康、食事の重要性
小学6年生 【特別活動】	「主食・主菜・副菜を知り、健康的な生活を送るための、食事のとり方を考えよう」	主食・主菜・副菜について学び、バイキング給食を通してバランスに気を付けた食事が大切であることを理解し、献立の組み合わせ方や日々の食事での栄養バランスの考えた食事をしていこうとする意欲を持つ。 食育の視点：感謝の心、食品を選択する能力

小学4年生 【特別活動】	「どんな朝ごはんがいいのか考えよう！」	栄養バランスのとれた朝食を考え、朝食をとろうとする意欲をもつ。 食育の視点：心身の健康、食事の重要性
小学6年生 【特別活動】	「おやつとり方について考えよう」	おやつを目安量を知り、望ましいおやつとり方について理解することができる。今後のおやつとり方を決めることができる。 食育の視点：食品を選択する能力、心身の健康
小学5年生 【特別活動】 TT形式	「お米の良さを見つけよう」	お米の良さに気づき、和食の文化と健康のためにお米を中心とした食生活を大事にする意欲を育てる。 食育の視点：心身の健康
小学6年生 【特別活動】 TT形式	「野さいパワーを知り、野さいを食べよう！」	野菜のパワーや旬について学び、進んで野菜を食べようとする意欲を育てる。 食育の視点：心身の健康

(2) 教育実習を通して学んだこと（学生の報告資料より抜粋）

- ・学年に応じた「食に関する指導」の計画を作成し、見通しを持てるようにすること。
- ・栄養教諭が児童に関わる時間は少ないので、廊下ですれ違った際や、給食の時間など時間、休憩時間等を活用して児童とコミュニケーションをとることで児童1人ひとりの性格やクラスの雰囲気分かり授業を進めやすくなる。
- ・他の教員と連携しながらクラスの実態や児童の様子を確認することが大切であり、TTで授業を行うことで授業をスムーズに展開することができる。
- ・児童の残食状況を毎日確認し、記録をすることが児童の実態を知ることにつながると学び、クラスの児童の実態を把握しておくことで、より良い指導につながる
- ・授業見学の際には、良いと思った表現や声かけをメモしておき実際に授業で使用すると、授業の質が向上する。
- ・授業を作る際は主体的な力を育成できるように個人で考える取り組みやグループ活動を取り入れる。
- ・電子黒板などの最新機器を活用することにより、教材づくりの負担を軽減させることができ、さらに児童の視線が上がり授業に集中させやすくなる。

4 成果と課題

教育実習を通して学んだことでは、全実習生が「児童の実態に沿った指導」の必要性和実践することの難しさを挙げていた。学校に1人職種であり、多岐にわたる業務を遂行しつつ、各教科等の時間において効果的な食に関する指導を行うためには、栄養教諭と児童および教員との適切なコミュニケーションが要となる。実践の場で、「教員の話す時間よりも児童に考えさせる時間を長くとり、児童の意見を広げるために、自分の言葉で発言させる」「児童が自分のこととして考え、児童にとって身近なものを例に挙げる」「どのような発問が必要なのかを考え授業づくりを行う」など、具体的な指導方法を目にしてより理解を深めたようである。一方で、技術修得となるとそう容易いことではないことも体験したようである。

今年度の実習生は実習期間を充実させるべく、児童や教員へ自ら積極的にかわりをもったようであり、その点は今後の学内実習においても事前の心構えとして意識させていきたい。児童と頑張っ対話しようとして意気込み過ぎるのではなく、楽しもうとする気持ちを持つこと、栄養教諭として「食の視点」を幅広くするべく、探求心・好奇心をもって平日頃からのネタ集めをすることを継続して実行してもらいたい。